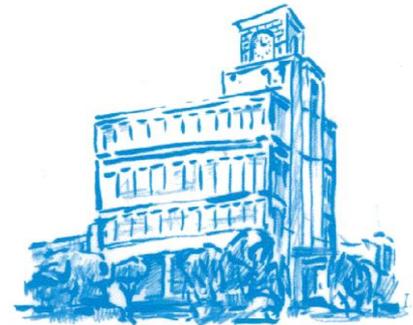


新しい学習指導要領に基づく実践ができていますか

伊丹市立総合教育センター

所長 永嶺 香織

子どもたちが楽しみにしていた夏休みを迎えました。夏季休業中は、教員にとって、1学期の授業を振り返り、「自分の目標」や「課題」の改善に向けてじっくりと研究や研修を深めたり、2学期以降の教材研究等を行ったりすることのできる絶好の機会です。この取組が教師の生命線である「授業力」を伸ばします。



特に、新しい学習指導要領が全面実施になった今年度は、教師主導の旧態依然たる授業から脱却し、新しい学習指導要領の趣旨に基づく授業が実践できたかを振り返らなければなりません。

先日、夏季研修の講師として来られた大学教授に「新しい学習指導要領に基づく授業実践のポイント」をお聞きしたところ、「教職員のベクトルを合わせていくために最も大切なことは、教職員みんなで新しい学習指導要領に基づく実践ができているか等の点検を行い、課題があれば改善に向けてどのようなことに取り組む必要があるかを話し合うなど共通理解を図ることです」言われました。

昨年度は、夏休みに授業を実施したために、新しい学習指導要領に基づく授業実践についての研究や研修、点検などの時間をとることができませんでした。今年の夏は、各校の研修において、新しい学習指導要領の視点に立った学びを実現することができたか、その実践に沿った「学習評価」を行うことができたか等を点検し、課題が見つければ具体的な改善策をみんなで考える絶好の機会です。

総合教育センターの夏季集中講座では、新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた教育実践講座を実施しています。また、様々な教育機関も、時間や距離の制限なく学べるオンラインや動画等の研修を提供しています。ぜひこの時期に、このような多様なリソースを活用し、自らのスキルアップを図り、授業力を向上をさせていただきたいと思います。

主体的・対話的で深い学びを実現するために

まずは1学期の学級の状態や授業を振り返り、教材研究や授業準備が必要です。

今回は**学級の状態に応じた協働学習の在り方**、**発問の工夫**、そしてそれらを取り入れた**授業計画の立て方**を紹介します。

1. 学級の状態に応じた協働学習の在り方



学級の状態

学級の状態を正しく把握し、状態に応じた**学習活動**と**教師の役割**を意識することで、まずは安心して学ぶことのできる学級をつくる。

学習活動

教師の役割

学級の状態（人間関係・自立性など）

教師の役割と、必要とされる学習活動

- ・主体的にいきいきと活動している。
- ・子ども同士の関わり合いや発言が積極的である。
- ・10人程度の中集団や学級全体で行動している。
- ・学級にルールが内在化している。

「自己教育・自主管理型」

- ・学級全体でかかわる活動の中にクラス討議を取り入れ、**よりよい結論を導く体験学習**をさせる。
- ・子どもに**リーダーの役割**をとらせたり、考えの違う相手と意識的に関わらせたりする。

「自主管理型」

- ・一定の枠内で学習活動をくり返し、**ルールを徐々に内在化**させる。
- ・グループの人数を増やし、グループ討議を取り入れたら、授業の中に子どもたちが考えさせる場面を取り入れたりする。

「教師主導型」

- ・小さなグループでペアでの丸付け・班で感想を言いあう等の活動を日常的に取り入れ、**協働の「楽しさ」を体感**させ、その中で**必要なソーシャルスキル**（他者と交わり、生活するための**能力**）を獲得させる。

- ・落ち着いて授業を受けているが人間関係が希薄である。
- ・学級のルールが低下している。
- ・子ども同士の小さな衝突が起きる。
- ・学級にルールが内在化していない。
- ・個別での活動が多い。

- ・教師の指示が通りにくい。
- ・問題行動が頻発している。
- ・学級内の規律と児童生徒同士の人間関係が不安定。

2. 発問の工夫



発問のルールを徹底し、効果を意識することで、子どもの**主体性**を引き出し、授業での議論を活性化させる。



発問の基本ルール「ASK」を徹底する

1. Accept 受け入れる

発問に対するどんな答えも教師が「**一度は受け入れる**」という姿勢を持つこと。
「**間違ってもいいんだよ**」と伝えることで正解・不正解に関係なく、積極的に子どもたちが発言することができます。
「授業での間違いは、間違いではなく、理解への第一歩」です。

2. Seek 見つけ出す

発問を通して子どもたちが知らないことに気づかせ、ともに考えていくこと。先生の想定する**模範解答**を求めたり、これまでの**常識**にとらわれたりするのではなく、発問を通してその子の「**考えていること、興味のあること**」を見つけ出そうとすることが大切です。

3. Know 知る

発問に対する多様な答えや考え方の中から、子どもが**自分とは異なる考えがあることを知る**。
子どもが自由に発言し、自ら行動できるようにするための発問と、子どもをやる気にさせるための**ファシリテーターとしての役割**が求められています。

発問の効果を意識し 3つの発問を使い分ける

重い発問

なかなか答えられないが
学びや気づきの
価値が大きい
ここぞという場面や
学級として取り組みたい
問題などに使う

良い発問

答えやすいだけでなく
学びや気づきがある
既習知識ではなく
なぜ？やどうしたい？
を考えるために
授業で主に使う

軽い発問

学びや気づきは少ないが、
答えやすい
前時の振り返りや
関心を持たせる
ときなどに使う

3. 授業計画の立て方

2での発問のルールと効果を踏まえ、場面に応じて適切に取り入れることで、主体的、対話的で深い学びを実現する**授業計画**を立てる。

場面に応じた発問	実現したい学び
<p>導入</p>  <ul style="list-style-type: none"> 前時の振り返り 「昨日勉強した〇〇覚えているかな？」 授業に関心を持たせる発問 「この写真って何だろう」 	<p>子どもが自由に発表し、「間違ってもいいんだ」という環境を整える。 授業に対して興味、関心を持たせ、「授業に対する姿勢」を整える。</p>
<p>展開</p>   <ul style="list-style-type: none"> めあてをたて、共有する 「今日の授業では何ができるようになりたいかな、何について考えたいかな」 学習する意義 「なぜ今日は〇〇について考えるのかな」 物事の本質を問う 「本当にこの答えでいいのかな」 「この解き方や考え方を勉強した意味は何だろう」 	<p>発問から本時の学習課題を理解し授業に対して見通しを持ち、学習活動を予想することで、何に着目し、どう考えるべきかを意識させる。</p> <p>→主体的な学び</p> <p>子どもが持つ情報量や既習の知識だけでは説明できない場面をつくり、多様な発言を引き出すことで、お互いの発言から新たな知識・発見を生み出す。</p> <p>→対話的な学び</p>
<p>まとめ</p>  <p>振り返り</p>  <ul style="list-style-type: none"> 学習した内容をまとめる 「どんな言葉が出てきたかな」 学習の振り返り 「新しくわかったこと、もっと知りたいことはあるかな」 既習内容との比較 「今日の勉強って、今までにしたことと何が違うんだろう」 この先を考える 「今日の学習を使える場面って他にもあるかな」 「次回はどうな事を考えたいかな」 	<p>学習内容を振り返り、言語化する。 既存の知識と新たに得た知識を整理することで、単なる事実の積み重ねではなく知識を体系化する。</p> <p>生きて働く知識や後々使える知識として身につけ、もっと知りたい、学んだことを使ってみたいという意欲を持って学習に取り組む。</p> <p>→深い学び</p>

